

II 特別シリーズII

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第142回

宇都宮大学の活動報告



安藤益夫
(宇都宮大学農学部
農業経済学科教授)

ラオス国立大学農学部
の学生10人を招聘、日本の技術開発等
で交流

ラオスはASEAN諸国の中でもミャンマー、カンボジアとともに後発途上国に位置づけられ、ASEAN経済統合に伴って急速な社会・経済改革が進められています。農林業においても伝統的な自給生産から輸出を念頭においた商品生産への転換が迫られています。とは言え、資本主義経済システムに転換して間もないラオスにとって、農産物を商品として生産するとはどういうことか、あるいは商品に付加価値を付けて高く売る難しさを肌で実感する機会は多くありません。そこで、将来ラオス農業の発展を担う若者たちに、それらを体感してもらいたい思いで、ラオス国立大学農学部の学生10人を招へいしました。

●到着日のトラブル



(写真1) 伝統食そばの試食

到着予定日には早朝6時から一行を出迎えるために成田空港で待機していましたが、8時を過ぎても出て来ない。一抹の不安と悪い予感がよぎりましたが、8時20分過ぎにようやく空港職員とともに一

行が姿を現しました。職員の説明によると、他の乗客が学生のスーツケースを間違えて持ち帰ったとのことで、そのため、来日初日のスケジュールを大幅に変更することになりました。幸い、スーツケースは2日後に無事戻りましたが、このようなリスクも考慮して余裕のあるスケジュールが大切であること痛感しました。

●講義＋フィールド視察

本研修の主眼は、日本の農業生産や技術開発などの現場を実際に見聞し、今後のラオス農業発展の参考にしてもらうことです。そのため、講義だけでなく、それに関連したフィールド視察をセットにした形のスケジュールを組みました。

まずは、日本農業の担い手不足を認識してもらうとともに、伝統的農産物である、こんにゃくやお茶を題材に、フードシステム(農業生産・流通、食品加工・消費)がグローバル化していくプロセスとその影響下における地域特有の農業・食文化の現状と展望について講義を行いました。その後は、日本農業の実態を肌で実感してもらうために、次のような研修を実施しました。

- (a) ローカルフードシステムに関する講義の後、それに関連した宇都宮市内の農家の女性による加工組織の加工施設を訪問し、そばをはじめとした伝統的な日本の家庭料理を食べながら、組合員と交流しました。(写真1)
- (b) 鹿沼市の先進的花き経営(イッセイ花園)を訪問し、シクラメン等が高額な価格で取引されていることに驚嘆し、その後、農業生産法人かぬまにおいて、農作業受託やハト麦製品の開発など活動概要を学びました。(写真



(写真3) 農業生産法人の施設見学



(写真2) 若手花き経営者の説明を熱心に聴く学生たち



(写真5) 甘いいちごに思わずニコリ！

進化したと思いきや、交流の機会を、共同研究などを通じて相互メリットのある交流にしたいと思

は、留学生として再度日本にきたいと発表する学生もおり、今回の受け入れの労苦が報われた思いでした。今後は、これを契機に学生交流だけでなく、共同研究などを通じて相互メリットのある交流にしたいと思



(写真4) 先進的トマト栽培施設見学

最終日のプレゼンでラオスの学生全員が、日本農業の先進的取組みだけでなく、日本の食文化や日本人のマナーの良さに言及していたことが印象的でした。なかには、留学生として再度日本にきたいと発表する学生もおり、今回の受け入れの労苦が報われた思いでした。今後は、これを契機に学生交流だけでなく、共同研究などを通じて相互メリットのある交流にしたいと思

2、写真3)
 (c) 栃木県下都賀農業振興事務所を訪問し、農業普及の仕組みと普及指導員の業務内容に関する講義を受けた後、普及員の実際の指導対象であるトマト農家を訪問し、農家の立場から農業普及システムの活用とメリットについて話を聞きました。
 (d) 益子町の株式会社和のトマトパークにて、高度トマト栽培施設の視察と農家への技術指導体制について学ぶとともに、施設自動環境制御技術に関して説明を受けました。その後、JAが野が運営する観光いちご栽培団地の仕組みと運営を学び、実際にいちご狩りも行い、その甘さに皆、感激していました。(写真4、写真5)
 (e) 最後の休日には日光東照宮を見学し、日本の伝統建築・文化を堪能。また、地域伝統食

を体験した昼食会場近くでは雪が残っており、人生初の経験に興奮していました。
 (f) 最終日は、これまでの講義・フィールド視察を通じて学んだ事や感じた事について、各自10分のプレゼンテーションを行い、日本の学生・教員と意見交換。夕方に開催した送別会では、宇都宮大学の学生が沖繩のエイサーを、ラオス国立大学の学生はラオスの伝統的舞踊を披露し、お互いにそれぞれの踊りの輪に加わり、大いに盛り上がりまりました。
 ●交流活動を終えて
 来日当初に学生達はアクシデントに見舞われたこともあってか、やや緊張していた様子でしたが、日を過ごすうちに生き生きとした顔つきになり、陽気に積極的に話しかけてくるようになりました。また、フィールド視察には必ず日本人学生をアテンションさせたことよって学生同士の交流も深まったようです。